都市計画遺産アンケート　KJ法A型図解化

未来志向の歴史研究で、国内外に応用できる知見を導き出せる

今、都市計画遺産を取り上げる意義をもう少し掘り下げる必要がある

過去の歴史趣味的な動機で研究するより、現代の問題意識、これからの都市計画的な問題に関心を持ち、過去の研究を学術的な活動として促進するような方向でやっていくのがよい。

歴史研究ではあるが、同時に新しい計画論、新たな手法とか考え方を導き出したい。過去のことが分かるだけでなく、そこから踏まえた新しい都市計画のあり方というのが、時間軸をかなり入れ込んだものを考えたい。

日本の急速な都市化過程のレビューが今後のアジアの都市発展への知見となりうる

素早い変化をする日本の都市の中で、どう時間軸を都市計画の中に入れて行くかが課題であり、急激に大都市化する今のアジア等の将来に接続できる示唆を得たい。

20世紀後半は世界史の中でも特徴のある時代で、かつ日本はその中でも先端を走っていたので、日本の経験の蓄積は今後のアジアが成長し、メガシティになっていく中で活かしていける。

市民が、地域の視点で、知られざる遺産を発掘することが、地域の後世のまちづくりに役立つ

現在あまり知られていない背景や思想、空間を遺産として紹介することが後世のまちづくりに役立つ

地元で市民が遺産を発掘することが重要

都市ごとの遺産を地元の自治体・大学・住民らが自ら発掘することが大切

実践的には、まちづくりとの関連で、市民が地元の遺産を掘り起こすことが有意義である

一般市民に都市計画への理解を深めてもらう意味で、全国に通用しなくとも地方レベルでの遺産を扱う意義がある

地域レベルで価値を共有するものから世界レベルでその価値を発信するものまで、いくつかの段階がある

都市空間の成り立ちを歴史・時間軸で示すことで市民と都市計画遺産を互いに位置づけられる

現在の都市空間の成立経緯の全体像を示すことが重要

どんな形で町が出来上がってきて現況があるという認識ができることは大事。どういう経緯でどういう変容となり、なおかつ今どういう形で残っているかという全体像の物語を示すことが都市計画遺産として重要。

実空間に限るとしても、それ自体を評価するというよりは、やはり過去からの一連の流れの中で捉えていくことが大事。その中に市民とかそういうものが入ってくる。

歴史的文脈をもった都市空間を市民を巻き込んで社会的に位置付ける必要がある

個別の空間について考えられていたコンセプトを突き詰めると、都市計画が何をやってきたかが分かる。まずいろんなもの集めた次には、先人は何やってくれたのかという点が関心となる。

都市計画遺産の価値を、証拠とともに丁寧に説明することが市民の理解、ひいては将来のまちづくりにつながり、積み重なる歴史やプロセスに着目することで都市計画遺産の個性が出る

市民に理解してもらえる説明と証拠が必要である。

都市や都市計画の歴史的特徴の価値への認識を一般市民に広めるとすれば、現在ダメだと思われるとしても、当時の背景や評価の理由をきっちり説明することが有効で、その証拠集めが重要。都市計画図等だけでなく近隣の風景写真や映像など、様々なエビデンスを残した方がいい。それが建築の遺産との性質の違い。

遺産の価値・意味を市民が分かるように説明する必要があり、実力を問われる。

一般市民が遺産の価値についてどれだけ共有可能なものかが課題である

遺産がいかなる意味で都市計画として価値を持つか、市民に理解できる論理で説明する必要がある

我々都市計画史研究者は今後都市計画の価値づけに取り組むことが重要で、都市計画的に見た価値を市民に分かるように説明できる実力を持たねばいけない。都市計画とは何かということを知らないと議論できない。

遺産の価値が市民に伝われば、その先にまちづくりにつながる可能性を有している

学会からオーソライズされて情報発信されたものを、市民がどう受け止めるのかという点が面白いところだし、誰にとって価値を持つ遺産であって、その伝わった先のところをどう考えるかということが、この遺産を考えていく上で重要な視点。

都市計画遺産の選定プロセスに市民に公開することで将来のまちづくりにつながる

遺産となる空間の評価ポイント・選定理由、改変されたことの評価の整理が難しい。

市民に理解されうる「空間」に対象を限るべきだ

都市計画遺産の独自性は構想力・アイデアだが市民に理解されるのは「空間」のみである

市民に理解されるのは「実現した空間」のみではないのか？

「実現した空間に魅力はないがそのアイデアが画期的だった」という評価に一般市民の理解は難しい

空間や景観ではなく計画そのものや実現に向けた戦略や努力の評価を一般市民に理解させるのは大きな課題である

隣接諸分野に対して都市計画遺産の独自性は「アイデア」であり、一般市民にその価値の理解は難しい

建築物でなく良く残っている道路網、街区、敷地割りなど土地の特徴を遺産と考えるべきである

遺産としての意義を説明すれば一般市民にも理解してもらえるものに限定した方が良い

遺産のレベルとして一般市民の理解の度合いの判断がつきにくい

遺産選定は計画者の構想力・アイデアやプロセスを検証し、将来へ継承していくものであるべきだが、「守るべき対象か」は慎重に判断されるべき

計画者の営為に対する経緯や構想力を検証する必要があり、これからの都市計画においても当時の都市計画プランナーが考えた構想力が今後のプランナーにも継承されていく必要がある。

計画事業の考え方や理念が評価できるもので、実際の空間形成に影響しているものであるべき

都市計画の「アイデア」は記録できても「守る」対象ではないことが多い

「保全だけでなく変化活用を考えたり、形の残らないものも併せてアーカイブする点が、都市計画遺産のオリジナリティである」へ

遺産の選定は価値の有無という主観的なものを押し付けることだから、それ自体が次の時代に評価される立場になる。

「正の遺産」の選定が基本だが、評価（正or負）は一意で決まらないので、「負の遺産」を残すことを検討すべき

遺産は正（良いもの）が基本となる

都市計画が中断・廃止された「負の遺産」を取り上げるべきか

まずは「正の遺産」を追求した上で「負の遺産」へ議論を広げるべき

都市計画の失敗という負の遺産の扱いは大きい課題で、負の遺産を消し去っていいのかという命題につながる。

アメリカの「負の遺産」的な高速道路は全部なくたが、日本も同じ方向性で進むのか。それとも高度経済成長が日本の１つの大切な記憶だとすると、違うあり方もありうる。

遺産としての正負は一意で決まらない

遺産の正負の評価は時代によって変化する

ある時代の社会的要請には応えたが、現在から見るとダメなものもある。それをどう今評価するのか、その社会的要請に応えているだけで本当に評価できるのか。マイナス、負の遺産と捉えられうるものもある可能性がある。

都市計画は、出来たものは現実に我々が生活している舞台の中にそのまま置かれ、評価が時間とともに変わり、正の遺産が負の遺産に変わることもある。どれ位の期間、正の遺産だったか等と一緒に考え、アーカイブするのが面白い。

歴史を考える上で、現在がダメだからといって遺産としてダメだという話ではない。

現在一般的にはダメだと思われていても、中には「良い」と言う人がいてそれを大切にできるのは、市民にとって都市のバラエティが増えることを意味する。従って都市計画遺産はそういう市民にとって資産である。

都市計画・空間は多様な主体による様々なベクトルの合成であり、個人や組織で代表されるような遺産の限定は難しい

土木遺産・建築遺産との違いは<事業手法・システム>にあるが、違いを強調する必要はなく、時に取り込んだりして、共存できる

土木・建築遺産との違いはないのではないか？

土木事業に該当する土木遺産的なものが都市計画事業としてやられているものは、都市計画遺産として扱う際に違いがあるのか。

土木や建築の遺産と都市計画の遺産の線引きが難しい

事業手法・システムこそが土木建築遺産との違い

都市計画は社会の要請を反映し、要請と空間・実態がくっついて形となり、それを支えるシステムがある。都市計画遺産は建築と違う性格を持ち、時代背景や計画者の意志がそこに表れているはず。

都市計画の一連の流れの中で、計画する行為の中に構想力があり、それを具体的に社会に落としていく道具としての「事業の仕組み」がある。

都市計画は事業手法を持っており、事業システムとしての都市計画、事業手法に関するものを遺産として考えていく必要もある。

建築ではなく「都市計画」という点に新たな価値の発見が期待できる

都市計画の技術が空間に現れることは難しいし、保全も難しい

建築や土木と異なり、都市計画遺産というシステムの保全は現実的に難しい

都市計画家の技術は構造物や空間にどれほど表れてくるのか疑問

都市計画遺産は土木・建築遺産を包含しうる

都市計画遺産の枠組みや評価の軸を考えるのは、都市計画とは何か、ということ。単体では土木遺産、建築遺産であり、都市計画遺産は土木と建築と造園が複合的な要素となって計画となっている点が枠組みの大きなところである。

重要文化財的価値のある土木遺産とセットで考え、都市計画遺産をキーワードにして連結し、総合的に景観保存していくキーワード・ツールに都市計画遺産がなればいい。

作られた土木施設から派生して、それを生活としてどう活かしているかまで含めれば、都市計画遺産と捉えなおすこともできる。

土木・建築遺産と違わなくてもよい

土木遺産と都市計画遺産は必ずしも明確な違いがあると言うことではなく、戦略的に使っていくというのがいい。

特に戦前は都市計画を土木技師・建築技師がやっていて、都市計画を土木や建築と切り分ける必要があるのかという疑問もある。

都市計画は歴史の連続性・積層性が重要

建築や土木のような「もの」としての評価でなく、都市計画はその後につながる「こと」としての評価が重要である

都市計画遺産では、そこに積み重なった魅力、いくつかプロセスを経た中で変容する意図が重なったときの魅力がある。その評価軸がうまく見いだせると、建築遺産との違いが出ておもしろい。

都市計画の履歴が積層していること

複数種の計画事業が関わった面的なものであるべき

民間都市計画も対象に含むべき

都市計画という概念を官のみでなく民間にも拡張すべき(中村良夫)

都市計画事業や都市計画図に基づいていないようなものも都市計画とは無関係ではない。

時代的範囲を近世以前・高度経済成長に広げるべきだが20世紀後半は扱いが大変

近代だけが都市計画遺産の対象ではない

近世や中世の要素にも注目してほしい

近代以前の歴史も対象にした方が良い

対象を近代に限る理由がよくわからない

都市計画遺産のデータベースとして都市計画史の意義がある。近世の地の中に近代の都市計画的な事業が展開したので、地を使ってどう社会的な要請に応えてきたのかを考えることができる。

高度経済成長期も対象に含めうる

どこら辺ぐらいまでを都市計画遺産にするのか。高度成長期の住宅団地でも跡形もなくなるものが大量に出てきうる。これらの成立経緯が分からないまま消えてしまうのは問題。

都市の構造を変えたプロジェクトなどを遺産として考えるのかは課題である

昭和30年代以降、自由な発想による計画が消えた理由を考えてほしい

建築の場合、保護の対象となる年代が順を追っているが、都市計画遺産は今まで何もやって来なかった。歴史的景観をみれば、都市計画遺産は時代を遡っていく方が良い。

歴史的に古い物から順繰りに都市計画遺産にするとしたら、世界中で都市化が進んだ20世紀後半のもののうち、保全して記憶に残すものや都市計画遺産とするものを選ぶのはものすごく大変。

初めは幅広く候補を拾うべき

評価軸の「希少さ」が先に立つと抜け落ちていくものが多くなるので、最初に網羅的に把握する作業があり、次に評価軸にかけるので良い。

都市計画遺産に対する考えは各人各様の印象であり、まだまだ多くの遺産候補がある

遺産となるのは都市計画の成果であり、都市計画家を含む人物ではない

海外に比べればわが国には都市計画遺産と呼べるものが少ない

「欧米だと昔の都市計画が現在まで残り実物が見られるが、日本は壊されている・・・」へ

未完の都市計画や未施行の制度・ルールを遺産とするのは適切でない

未完の計画や未施行の計画、限定的なエリアから都市全体に至るまでの計画を含めていく方が内容が豊かになる

都市計画は一連の行為だから、そこを整理してかからないといけない。建築遺産の対象は出来上がったものだが、都市計画では最終的に実現したもの・しないものがある。

最終的には近代以降のものとするにしても、議論の過程においてはあまり限定的に捉えなくてもいい。実現されなかったプランはどうだったのかを議論してもよく、今になれば、そのプランニングが及ぼした影響が重要になる場合もある。近世のものも議論の対象とし、最終的に絞っていく時に厳選していく形で良い。

日本人による外地の事績を取り上げるべきか

農山漁村の集落計画を対象とするのか議論すべき

大都市の都市計画遺産はすでに認知されており、地方都市の遺産の研究や発掘が必要である

同時代性のある遺産を複数セットで扱うことなどが選定のポイント

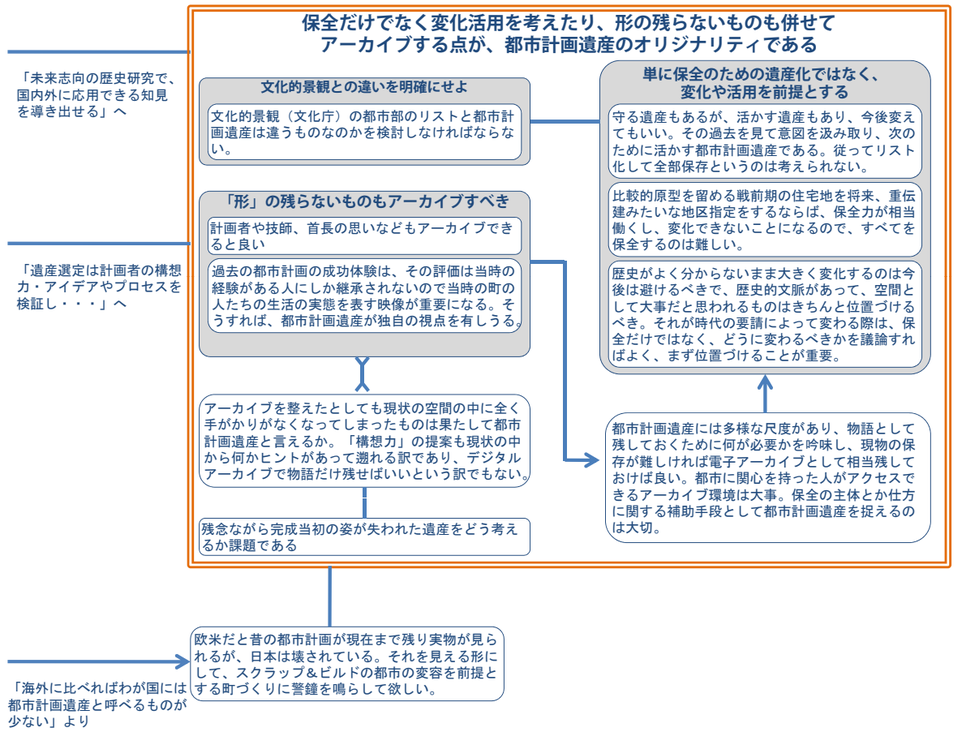
世界遺産のような「遺産群」という考え方も重要

洗い出しに既往リストや海外先行事例が参考になる

海外での都市計画遺産に関する動きを調べたら良い

遺産の選定にあたっては都市計画学会賞を過去に受賞したプロジェクトが参考になる

文化的景観（文化庁）の評価の仕方や何をどう保全するかという枠組みも参考になる。


保全だけでなく変化活用を考えたり、形の残らないものも併せて
アーカイブする点が、都市計画遺産のオリジナリティである
「未来志向の歴史研究で、国内外に応用できる知見を導き出せる」へ
文化的景観との違いを明確にせよ
文化的景観（文化庁）の都市部のリストと都市計画遺産は違うものなのかを検討しなければならない。
「形」の残らないものもアーカイブすべき
計画者や技師、首長の思いなどもアーカイブできると良い
「遺産選定は計画者の構想力・アイデアやプロセスを検証し・・・」へ
過去の都市計画の成功体験は、その評価は当時の経験がある人にしか継承されないので当時の町の人たちの生活の実態を表す映像が重要になる。そうすれば、都市計画遺産が独自の視点を有しうる。
アーカイブを整えたとしても現状の空間の中に全く手がかりがなくなってしまったものは果たして都市計画遺産と言えるか。「構想力」の提案も現状の中から何かヒントがあって遡れる訳であり、デジタルアーカイブで物語だけ残せばいいという訳でもない。
残念ながら完成当初の姿が失われた遺産をどう考えるか課題である
単に保全のための遺産化ではなく、
変化や活用を前提とする
守る遺産もあるが、活かす遺産もあり、今後変えてもいい。その過去を見て意図を汲み取り、次のために活かす都市計画遺産である。従ってリスト化して全部保存というのは考えられない。
比較的原型を留める戦前期の住宅地を将来、重伝建みたいな地区指定をするならば、保全力が相当働くし、変化できないことになるので、すべてを保全するのは難しい。
歴史がよく分からないまま大きく変化するのは今後は避けるべきで、歴史的文脈があって、空間として大事だと思われるものはきちんと位置づけるべき。それが時代の要請によって変わる際は、保全だけではなく、どうに変わるべきかを議論すればよく、まず位置づけることが重要。
都市計画遺産には多様な尺度があり、物語として残しておくために何が必要かを吟味し、現物の保存が難しければ電子アーカイブとして相当残しておけば良い。都市に関心を持った人がアクセスできるアーカイブ環境は大事。保全の主体とか仕方に関する補助手段として都市計画遺産を捉えるのは大切。
欧米だと昔の都市計画が現在まで残り実物が見られるが、日本は壊されている。それを見える形にして、スクラップ＆ビルドの都市の変容を前提とする町づくりに警鐘を鳴らして欲しい。
「海外に比べればわが国には都市計画遺産と呼べるものが少ない」より